

MEDICAL ESSAY 2

なじみのなかで

小笠原 望

一通の手紙

病院から帰ると、食卓の上に一通の手紙が置いてあった。裏返して差出人の名前を見ても、心当たりはなかった。読み始めていくうちに、「ああ、あの河合さんの娘さん…」と急に肩の力が抜け、私は1か月前に亡くなられた河合さんのことを思い出していた。

河合さんは、長く外来に通ってこられたなじみの患者さんだった。その手紙は、ずっと看病を続けていた、大阪に住む長女からのものだった。

手紙は型通りの挨拶のあと、「先生が父に下さったあの本は、父にゆっくりと読んでもらおうと思ひ、柩の中に一緒に入れました。先生が本に書いてくれた父への言葉は、コピーして私たちきょうだいが持つことにしました」と書かれてあった。

河合さんとの出会い

河合さんとは、昭和52年の夏に初めて出会った。髄膜炎での入院だった。髄膜炎は私には初めてで、腰椎穿刺も初めてさせてもらったことをよく覚えている。2か月あまりの入院だったが、最初の検査は先輩の先生にしてもらって、私はそばで見ている。

2度目は河合さんも元気になっていて、私が先輩の先生を呼ぼうとしたら、「先生、自分でしてみたなら、わたしはかまわんよ…」とすすめてくれた。少しためらったが、そう言ってくれるならと、

初めての腰椎穿刺をした。太っていて深くてなかなか入らず、結局は先輩の先生に来てもらうほど、難航した。

退院した河合さんは、月に1回第1木曜日に外来に来た。河合さんの顔が見えたら、「あっ、月初めてになったんだねえ」と看護婦さんと話すくらい、10年以上予約の日をはずすことなく、外来を受診していた。

河合さんの上着やワイシャツから、決まってナフタリンの匂いがしていた。私は少年の頃を思い出しながら、いい気持ちだった。河合さんにとっての病院へ来ることの位置がわかるような気がしていた。

何年かたって、私の新人時代を書くことがあり、腰椎穿刺の話をしたら、「先生、ちょっとはうまくなかったかなあ。あれは大変だったなあ、正直いって痛かった」と大きい目をしておどけていた。「この頃は、若い先生に教えているんよ。初めてはみんなあの時と一緒に、難しいようだけど…」とちょっと言い訳がましく、話したことだった。

その後も、きちんと月1回の外来通院を続けていた。相変わらず元気で、軽い糖尿病と高血圧があるのだが、診察室では雑談をしては、また来月という調子だった。そして、「先生の患者さんは、この頃増えてきてるんやなあ。だんだん待つ時間が長くなってきた」とぼやいていた。

形だけの主治医

昨年5月だった。その河合さんが、農作業をしているとちょっと息切れがして胸が痛い、十

何年かで初めて症状らしい症状を訴えた。私は軽い気持ちで、「写真を撮ろうよ。念のため」と胸部写真を指示した。

その写真には、肺の腫瘤影があった。「あ〜、これは何だ」と、私は心の中で悲鳴をあげていた。隣の診察室の、呼吸器科の志田原先生に写真を見せたら、「肺癌でしょうね」との答えだった。河合さんに、入院のうえの検査が必要であること、そして呼吸器の専門の先生に主治医をお願いしようと思う旨、話をした。

「主治医は先生じゃないと寂しいなあ」

ぼつんと河合さんが言った。「わかりました」と、私は看護婦さんに「主治医は小笠原」と指示をしないおした。

入院してからの検査で、肺癌、組織は小細胞癌とわかった。手術は無理で、化学療法を始めることとなった。志田原先生に治療の指示はすべてお願いして、私は病室で今までと同じように話をする、形だけの主治医となった。

難航する治療

河合さんの久しぶりの入院生活には、大阪に住む長女が看病に帰ってきていた。病室で3人で話をすると、外来の診察室とはまた違う河合さんのいろんな話を聞くことができた。長女が来ると、河合さんはよく食べ、機嫌がよかった。

何回かの化学療法で腫瘍は縮小はするのだが、期待したほどの効果ではなかった。末梢血の回復がしだいに遅くなり、治療は行き詰まってきた。「先生、治療はこたえるなあ。終戦の時には、石垣島にいて、食べるものがなくてやせ細ってやっと生きて帰れたんだけど、あの時よりもしんどいなあ」と、ぼやきが出ていた。「これからどうしようか」と志田原先生と治療の話し合いとなった。「治療だけを考えたら、もう少しとも思うんですが…」。「本人もちょっと参っているようだし、ここで一旦退院もひとつかなあ」、いろいろ話し合った結論は河合さんに告知をして、自分で決めてもらおうとのこととなった。

じつは、入院して初めての家族との話し合いで

は「告知は本人は耐えられないと思う」とのこと、肺真菌症という話にしていた。そして、家族の気持ちを大事にしてここまでやってきた。しかしここに至って、私たちだけでこれからを決めるのは失礼のような気がした。

説明は私がした。癌という言葉は使わなかったが、治療が難航していて、ここで一休みでもいいし、もう一度治療を頑張るか、河合さんの生きてきたように決めたらどうだろうか、どちらでないといけないということはない、そんな話をした。

「困ったなあ、そりゃあ困った」、河合さんは本当に困った顔をした。私もそれ以上は、突っ込んだ話をしなかった。「家族のかたとも、相談したら…」、私はそんな言葉で話を終わった。相談のための外泊もしたが、結論は消極的ながら治療を続けようということだった。

しかし、その後は状態はしだいに悪くなってきて、治療の継続は難しくなった。河合さんは、化学療法の合間に娯楽小説の雑誌をよく読んでいた。それが、ちょうど私の父がよく読んでいた雑誌だったので、話が弾むきっかけともなった。

私が初めての単行本ができることを話すと、すぐ喜んでくれた。「5冊はきちんと買うように」と家族には何回も言っていたようだ。「お金があったら、先生の本のスポンサーになるのに…」と悔しがっていたとも聞いた。

私も河合さんも、待ちに待っていたその単行本が3冊、東京から送られてきた時には、河合さんは昏睡となっていた。私が夜、その1冊を病室に持っていくと、付き添いの娘さんに「折角だから、サインを…」と言われた。

私はちょっと照れ臭かったが、ベッドの上の河合さんを見ながら「私に初めて、腰椎穿刺の検査をさせていただいた河合貞利さん、ありがとうございました。いろいろ教えていただいたことを大事にします」、詳しくは忘れたがそんな文章を本の扉に書いた。

その数日後、河合さんは亡くなった。

看 取 り

長い付き合い、それも私の駆け出しの時代からのずっとの付き合いの中での、ターミナルの場面は、私は治療のことは傍観者であったが、病室で家族を含めた心のやりとりができて、何とも言えない気持ちだった。昏睡の中でも、本が間に合ったことはうれしかった。

河合さんの柩におさめられた1冊の私の本。な

じみの中での看取り、病院の中でもこんな場面があってもいいのではと思った。

あれから何度も、私は腰椎穿刺をする。そのたびに、私は河合さんのことを思い出し、そして患者さんとのしみじみのターミナルのことを思っている。

第4回名古屋研修会報告

去る10月31日土曜日、第4回名古屋研修会が社会保険中京病院を会場にして開催されました。今回は東海地区の会員の手で企画運営をするという初めての試みでしたので、その運営にあたった者として感想をまじえ報告したいと思います。

東海地区会員といってもまだ数人しかいないため活動できる者は総動員する必要があり、実行委員の名古屋第一赤十字病院の大平さん、日赤愛知女子短大の林さんのほか、公立陶生病院の青山さんにも協力をお願いし、計画から実行までを進めました。事前の準備段階では、日曜日にランチをとりながら、あるいは平日の夜名古屋の繁華街「栄」に集まって相談の会を持ちました。三人寄れば文殊の知恵といいますが、普段ひとりで仕事をしている私にとっては人の意見やアイデアを聞くというだけでとても刺激的なことでしたし、集まればパワーが出るものだとも感じました。

さて、当日は秋晴れのよい日になり、各地から22名(うち非会員6名)の参加がありました。当院が会場なので、準備を整え皆さんを待つつもりだったのですが、結局私の悪い癖で間際までコピーをしていたり、あわてて院内の他部署へ借り物をしに走ったりしているうちに時間になってしまいました。大平さん、林さん、青山さんによって会場設営は着々と進んでおり、定刻通り当院土井昭成院長の挨拶が始まりました。司会は大平さんで、終始なごやかな雰囲気だったと思います。

午前中は高山赤十字病院の木下久美子氏による

講義「必要とされる情報(資料)を提供するために-担当者の役割と必要な知識-」で、図書室業務の基本的な情報提供サービスについての実例を挙げての丁寧な説明は、経験年数にかかわらずたいへん参考になる内容でした。

午後はまずCD-ROMの講義と実習で、当院のNEC PC-9801と、デモをお願いした丸善側の三菱MAXYを並べスタンバイOK。MEDLINEの2種類のシステムを比較したり、医中誌CDの検索を実際に各自が体験する機会を持つのが目的でした。

そのあとは、お茶を飲みながらの質疑応答・ディスカッションで、いつのまにか閉会の時間。あわただしいうちに終わってしまった気がします。

今回、初めて研修会の企画、運営にあたった私たちの感想はまず「やってみて初めてわかった主催者の苦労」でした。これまで病図協の研修会に何度も参加してきて、研修会というのは「日頃の業務に役立つ知識・情報が得られ、ためになる」のが当然と思い込んでいたのですが、容易なことではないのだとよくわかりました。反省点を数えればきりがなく、会場の提供者としても至らない点が数多くありましたが、初めてということで大目に見ていただけるものと考えことにします。

“何事も経験”という言葉は本当です。自分たちが描いていたシナリオどおり、予想どおりにはいかないものだとも実感しました。ただ、何人かの人にも来てよかったと思ってもらえたのなら、私たちとしては素直に喜びたいと思います。

最後に、講師を気持ちよく引き受けてくださった木下さん、何かとアドバイスをくださった協議会の幹事の方々に誌上を借り、お礼申し上げます。

(文責・大橋真紀子)